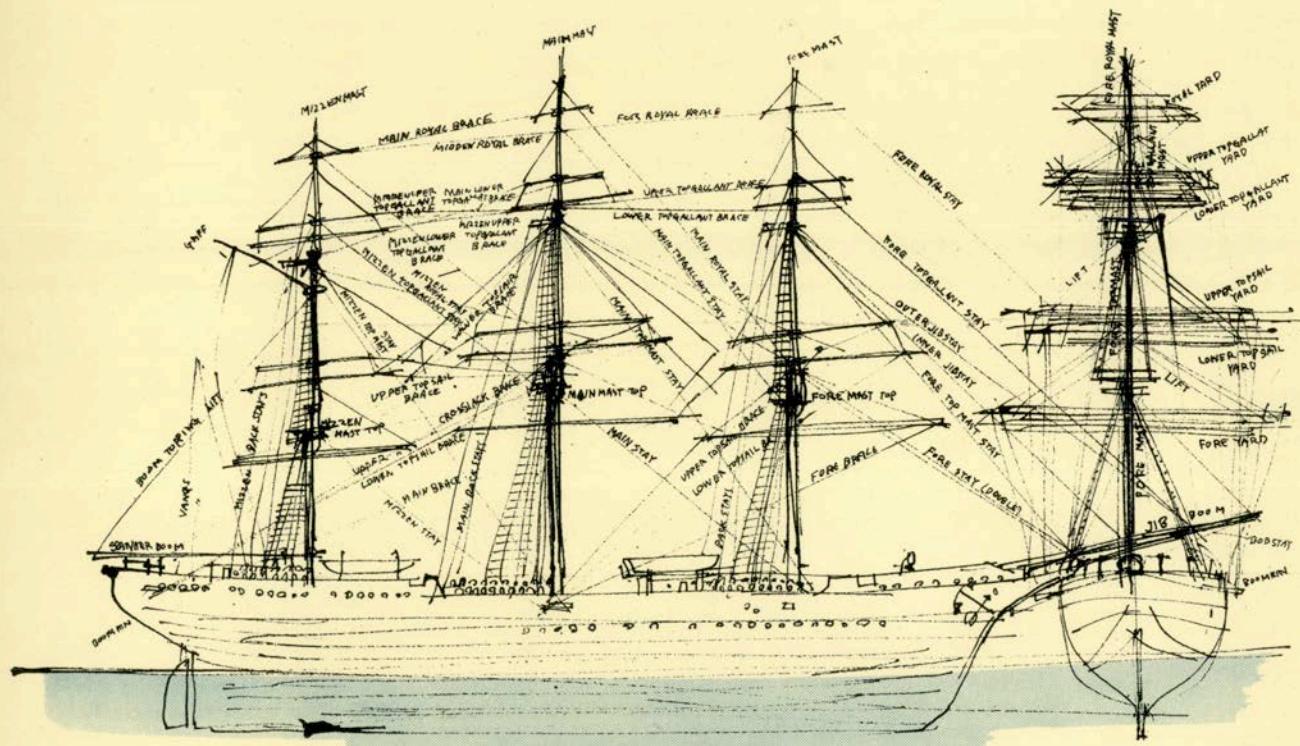


郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1962 / 10



Ακοίσα

monthly magazine kobekko october 1962 no. 19

昭和37年10月1日発行（毎月1回1日発行）



トヨペット クラウン デラックス

兵庫トヨタ自動車株式会社

本社 神戸市長田区北町215・神戸(6)5051

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



神戸と女性

近衛 真里（宝塚花組）六甲山上にて…

均整のとれたスタイルで踊るモダン・ダンスには定評のある近衛さんは、宝塚スケート・チームにあっても花形的存在です。舞台生活九年のキャリアをもつ彼女は、最近、歌や芝居にも意欲をみせ明石・寿美なきあとの男役スターとして大きな期待がよせられています。

神戸出身。

（カメラ・杉尾友士郎）



SONY[®]

マイクロテレビ



世界最初のエビタキシャル・トランジスタ使用
トランジスタが
テレビを変えた

ソニー商事株式会社大阪支店
神戸ソニー販売株式会社
大阪市西区立売堀南通二丁目七〇
神戸市生田区中山手通一丁目二〇
TEL 569-4166
(22) 八六〇六七七

オールトランジスタ24石 5-303型 ¥65,000

- 世界一小さく世界一軽い・電話と同じ大きさ
- 自動車の中でも、どこでも、ごらんになれる
- キメの細かい美術印刷のようなすぐれた画質
- 電源は専用電池・電灯線・自動車のバッテリ
ーすべてOKで消費電力は大型テレビの1/10

目 次



- 1 神戸と女性／PHOTO・近衛真理
- 3 連載隨想第3回／瀬戸内海の海賊・白川渥
- 9 れんさい隨想／神戸のこと手当り次第
淀川長治
- 12 連載・間わず語り／⑦・時代小説と男性
司馬遼太郎
- 17 私の好きなスター／花柳芳恵似子
- 18 神戸だからえがく夢No.11／藤本義一
- 20 野のはな対談①／すてきなお嬢さんこんにちわ
岡部伊都子
- 24 座談会／里親制度に愛の手を・ゲスト桧前敏彦
- 28 結婚シーズンを迎えて／福富芳美
- 30 WEDDING SHOPPING
- 35 座談会／神戸港はベリーグッド！
- 40 神戸うまいもの地図・ランチタイム
- 42 神戸うまいもん巡礼／No.3・赤尾兜子
- 44 BONSIOR MADAME／コトブキ
- 47 対談／アイジョージ・鴨居羊子
- 48 表紙のことば／小磯良平
- 49 びんくこーなー(T)
- 52 KOBEKKO SHOPPING GUIDE
- 57 ショート・ショート⑦ざんげ話／陳舜臣
- 60 花時計・編集後記
- 表紙／小磯良平・カメラ／杉尾友士郎・米田定蔵
デザイン／橋昭三・コピー／五十嵐恭子

瀬戸内海の海賊

白川渥



柴田鍊三郎とはゴルフ友達である。久しぶりに来神した柴田を迎えて、垂水ゴルフ場でクラブを振ったあと、キングス・アームスで夕食を摂りながらの対談

「柴田君、神戸に来たのは初めて?」

「いや、神戸は馴染のある町なんだよ。私の兄が、柴田剣太郎といってね。布引のあたりに貯水池があるだろう、あの近くにいてね。私が少年の頃、時どき来たことがあるんですよ。昭和十年頃だったなそれからは全然ご無沙汰で、こんど始めてだよ。だから久し振りで戦後始めてと云うことになるな」

「出身が岡山でしょう。案外、縁遠いんだな」

「僕は京都にはしょっちゅう来るんだが、不思議に神戸にまで来ないな。明日も京都に仕事に行くんだよ。中村錦之助君が、女房の手料理を食べに来てくれといつて来てるね。少し早く神戸を発つ心算なんです。だけど、神戸はいいね。ゴルフ場も近いし、君なんか、東京へきたいとは思わないだろう」

「ところで、あんた、慶應の支那文学だったんだね。なかなか多作のようだが、文章の格調が高くて、きっちつとしているのに、いつも敬服しているんだ。支那文学ときいてなるほどと思ったね。文章の骨格にどこか漢文脈がある」

「ぼくは奥野信太郎門下だ」

「ぼくはいま『毎日新聞』に『善忘十話』を書いている、諸橋轍次博士の教えを受けたんだ。東京高師でね」

「あんたが諸橋門下とは知らなんだ。諸橋博士の漢和大辞典ね、たいたものですよ」

「諸橋博士は当時、学生のあいだにも人気があつたナ。面白い先生ですよ、『善忘十話』に愉快な逸話を書いていられる一講道館の嘉納治五郎氏を訪ねて、所用をすませて帰える時、帽子を忘れて、嘉納邸に取つてかえしたところ、嘉納治五郎先生が笑つて、『君、帽子は手にもつてないか』諸橋先生、自分で手に持つていたんだナーチョウベンハウエルの『笑い哲学』じやないが、あの十話は『物忘れの哲学』だナ」

「そう言うゴーケツ先生はだんだんいなくなつたね」

「ところで柴田君は時代小説を自由自在に書いているが、どうして書いているの」

「江戸時代のことを書こうと思うと、三年間みつかり江戸の歴史や風俗の勉強するんだ。すると、その頃の江戸の街が、脳裏に浮んで来るようになる。街のこの道には橋があつて、あそこには四ツ辻、この河には土手があるというのが判るようになると舞台の設定が出来て、庶民の生活がいきいきと描ける。三年やれば、誰にだって書けますよ」

「僕はね、一度、瀬戸内海の海賊ものを書きたいと思っているんだ

が……」

「それは面白い。ぜひお書きになるといいでですよ、海賊といつても実際には悪いものではないんですよ。特に瀬戸内海の海賊は」「そうなんだ。あの頃の海賊というのは、海の支配者というような意味なんで、『中央政権』から見れば、海は治外法権でね、つまり、中央政権中心の歴史から見れば、税金を納めない「賊」、徒というところになる。ただ中央から独立して、制海権をもつてた水軍を海賊といったにすぎない。事実、南朝五十七年を支えたものは、海賊だと言つてもいい。海のルートによつて、足利政権を手古すらせたんだナ。いまでも瀬戸内の島々には、海賊の館が残つているところがあるよ。沙の匂いのする雄大なロマンを書いてみたいね」

「瀬戸内海のそういう水軍の間では、航海術が発達したらしいね。ちょうどギリシャの多島海のように」

「この海の支配者達はまたいろいろな仕事をやつてゐるでしよう。秀吉の朝鮮征伐の時の水軍もそうだし、江戸時代には、江戸の度々の飢饉や大火を、瀬戸内海の船師たちが、奥州酒田の米を瀬戸内海を経由して救つてゐるんだ。とにかく、この神戸港なんぞも、昔大輪田の泊と言われた頃は、その海の支配者たちの基地だった訳だ」

「そういうものが今日の神戸の海運業者の先駆とも言えるね」

「とにかく、その頃の海の人間には不思議なバイタリティがあるね。海国日本にもイギリス風の海賊文学が欲しいよ。ところで、これから京都へは何の仕事で?」

「東映で映画の脚本を頼まれてね、少し変った映画をねらつてゐるんだ。もちろん、時代物なんだが、先ずトップシーズンに、東海道を走る特急こだまを出して、そこからチャンバラの時代にはいろいろと言う構成なんだが。……」

「柴田文学らしいダンディな趣向だ。なかなか洒落てるよ」



神戸宝石は伝統に輝く宝石店です。宝石を磨き続けて二十数年… 素晴らしい技術が生んだその宝石は、皇后様高松宮様にご納品した栄誉と実績に輝やいています。

その神戸宝石がトアロードに素適なサービスショップを開きました。ミナトコウベの秋の御散策に、宝石のことなら何でも安心してご相談できる神戸宝石トアロード店に、どうぞお立寄り下さい。

直輸入 宝石・貴金属・ゴルフカップ

タニジ

神戸宝石トアロード店

トアロード国鉄高架北100米東角/10時~7時(月曜休)/TEL③2397

オルガンが
お安くなりました

ヤマハオルガン

- 世界一の生産設備完成
- 通産大臣賞に輝くヤマハの技術

“よりよい製品をより安く”をモットーに日夜努力を重ねております。このたびのオルガン値下げもそのひとつです。この機会にどうぞヤマハオルガンをお求め下さい。



20B-M

61鍵 総2列笛
送風用モーター付

旧価格 ￥31,000

新定価 ￥28,000

神戸もとまち



日本楽器

元町通2丁目 TEL (3) 1631-2

世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村パール

北村真珠株式会社

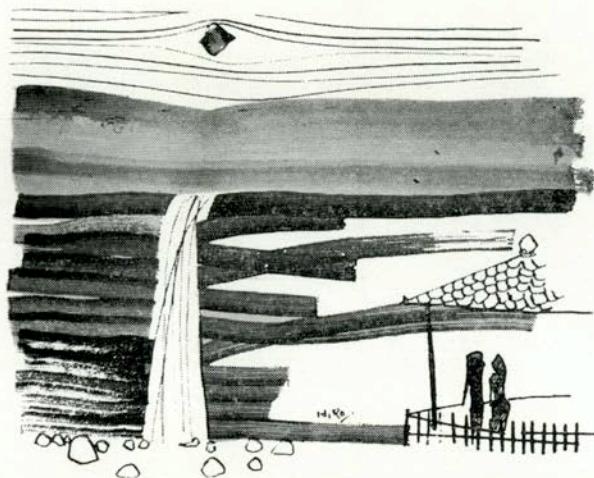
神戸／元町2丁目 東京／スギヤ商店センター
TEL (3) 0072-5718 03-2

神戸のこと 手当り次第

淀川長治
え・松 本 宏

秋になると、今でも布引のめん滝の茶店のラムネが恋しくなる。谷まつたそのうすぐらい茶店から、はるか高く青空を眺めると目に痛い秋色の美しさ。峰から峰に走る雲の白さが滝の流れにかすかに映えて、そのひやりと肌さす冷気が滝のしぶきをふくんで、ここが電車道から歩いて十分などとは神戸は天国だ。をん滝はからりと明るくその茶店のコーヒー・カップが西洋人ごのみをならつたかの上品で清潔で美しかつた。

晴れた日曜日には……ツエンチクロスに行こう。布引の滝のけい流にそつてさらに奥にその川の流れにあちこちと二十の飛び石の渡しがあつた。ツーエンティ・クロスとは呼ばないでツエンチクロスなどと云うところが嬉しかつた。この布引の滝で売つていた黒い西瓜切り人形は今はどうなつたのであろう。したんまがいの黒ぬりの木を巧みに彫つて丸坊主の人形が坐つた前にまな板がありその上の上



西瓜を人形が手にしたホーチョーこれが右はしの柚木を手でくるくると廻すたびにその人形は首を振りその手はヒヨコリヒヨコリと西瓜を切る。その西瓜の割れ目は真赤に塗られ人形の口をひらくその歯が真白という、その黒赤白のデザインがすばらしい。この首振り黒坊主人形ははたして今もあるのであらうか。

×

秋は食い氣も出て、思えば生田筋の「たまひろ」三の宮の「あなもん亭」それから柳原から元町へ移った「青辰」（あをたつ）はどうなつたのであらう。「青辰」は種が切れるとおひるすぎでもう店を閉めると聞いた。それも名店氣質でよからうが、やっぱり夜の客も大切にするのがよい。柳原に「青辰」があつたころは、あの箱ずしの上のタマゴと、それから白いめしにまじったきくらげの味が忘れられない。明石から高砂にかけてのあなご、東京の人があなごを馬鹿にしているのはこれを知らぬからであろう。

×

「ニュートン」「サノヘ」みんな懐しく生田筋で「エバントイ」をやつていただけに私もお客様のサーヴィスに店に出た思い出がある、岡田茉莉子のお父さんの時彦さんが、さつと覗いてあれとこれとそれと云いながらネクタイ五本を一度に買ってスーツと行つちやう時なんかむやみと感心したものだつた。そのネクタイがフランス製の今で申せば一本三千円級のものだつただけにその買いつぶりに見とれ見惚れたのであつた。

×

きれいな思い出もあるが勇敢な思い出も糸の尾をひいて懐しい。三中に柳原から歩いて通つた私はいつも二中の下を通る。今はすっかりあとたもないが、昔、そこらあたりに部落民というのがあつて「あそこを通つたらあかんで」と家のものによく云われてきた。目医者が相手が部落民というので断つたのをこの目で見たことがある。私は「アホくさ」と思った。腹が立つて仕方がなかつた。その部落の人たちの家のはずれに靴屋があつた。私はわざとそこでいつも靴の底をなしてもらう。その靴屋の親父がいかにも人が良さそ



うでこれがまた気に入った。今はそんなこともなくなつたが、私の中学時代まではまだ「あそこの嫁はんはアレやでえ」とかげぐちをきく。とうとう腹の虫がをさまらなくなつた私はある日ひそかに石ケンと手ぬぐいを学校の鞄の中にかくし、学校のかえり道にその人たちのたてこんだ家の奥の露地のつき当りの、その人たち専門の露天に行つたことがある。今で云えば二十円が普通なら、それが十円つまり世間の半がくの値段であつて、ガラス戸を押し開けて這入るともう人がいっぱい小さな湯船は大人子供で海水浴の茶店風呂さながらだった。妙な中学生が学生服をぬいで這入りこんできたのを別に誰一人いぶかる者とてなく、子供はキヤッキヤッと騒ぎ大人は汚い手ぬぐいでごつた湯船の湯の中で顔も頭もするすると洗いながらの大聲の世間ばなし。私はその湯の中でああ嬉しいと目を細くしたいま私は部落民と同じ湯の中にいる。あの連中の肌の汗が湯の中でとけてこの私の肌にもしみこんでゆく。いいじやないか、おんなじ「私たち」。さて家にかえり家人にけろりとして家の湯にその夜あらためて知らん顔で這入つたのはもちろんである。

×

私の父は山本通りに五けんほど貸し家を持つつていて、それがみんな外人向きの洋式でアメリカ人の借り手、イギリス人の借り手、それにインド人もあつてそのインド人が水洗便所が嫌いでどうしても日本式にしてくれときかなかつた。どうしてと聞くと水洗だとあのシャーととび出す水洗のしぶきがちよつとでもおいどにふれるとも一度からだ全体シャワーをあびねば神さまに嫌やがられるという。お祈りの時間に家賃（やちん）をとりに行くと手を横にふりながら待つてくれと合図して、ベッドの下において坐つて両手を上げ下げしながら頭をカーペットにすりつけてアラーの神かなにかを神妙に祈つていたのも思い出した。

神戸は好きだ。人間が生きている。神戸は私の誇りである。東京に何十年住みついても私は……神戸が……大好きだ。

（映画評論家）